

「**希望がない時に希望を語れる人**」 使徒言行録 3：1～10

## I 導入部

おはようございます。5月の第四日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができ、感謝致します。先週は、ペンテコステ礼拝、聖霊降臨日を記念する礼拝でした。4名の教会学校のお友だちが洗礼を受けました。家族も共に参加して、素晴らしい、思い出の残る洗礼式でした。また、一人の姉妹の入会式が行われました。これからも青葉台教会のファミリーに加わる方が起こされることを期待し、祈ります。

イエス様の約束の言葉を握りしめて祈り待ち望む120名の人々の上に聖霊が降りました。彼らは、外国の言葉でイエス様のことを語り、イエス様の証人としての働きを始めました。ペトロは、説教し、3000人の人々がイエス様を信じ、洗礼を受け、教会が生まれたのです。先週は、ペンテコステの礼拝ですが、教会の誕生ということで、教会学校ではケーキを食べたようです。三浦校長先生が私のためにケーキを取って置いて下さいましたので、第三礼拝が終わり、家に帰り、ケーキをいただきました。とてもおいしいケーキでした。洗礼を受けたお友だち、入会された姉妹を祝い、教会の誕生を記念して祝い、本当においしく感謝してケーキをいただきました。

聖霊が与えられるのは、イエス様の証人となるためでした。今日は、使徒言行録3章1節から10節を通して、「**希望がない時に希望を語れる人**」と題してお話し致します。

イエス様の証人となるということは、イエス様の十字架と復活、福音を語り、人々を救いに導くことですが、それと同時に、絶望や苦しみを持つ人々に、希望を失っている人々に、イエス様を通して喜びと感謝と希望を与えることだと思うのです。

## II 本論部

### 一、聖霊が神（イエス様）の言葉を思い起こさせる

福音書に出てくるイエス様の弟子たちは、人間的で、この世的で、自分たちの出世だけを望んで、自分の思い通りに生きていたのですが、聖霊が与えられて彼らは変えられました。聖霊が与えられてスーパーマンのように、外見的に強くなったというよりも、イエス様の証人として、イエス様を人々に証しする力が与えられたのです。

使徒言行録3章には、「生まれながら足の不自由な男」の話があります。ヨハネによる福音書9章には、生まれつき目の見えない人のことが記されています。聖霊を受ける前の生まれつき目の見えない人に対する態度と聖霊を受けた後の生まれながら足の不自由な男に対する弟子たちの態度には、大きな違いがあります。

ヨハネによる福音書9章では、生まれつき目の見えない人を見て、弟子たちはイエス様に尋ねます。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか、

本人ですか。それとも、両親ですか。」(ヨハネ9:2) 病気であるとか災いがあるということは、罪の結果であると考えられていたようです。ですから、道を歩いていて、今日の男性と同じでしょう。道端で施しを乞うていたのでしょう。生まれつき目が見えないということはどうわさになっていたのかも知れません。特に、生まれつき目が見えないという悲惨な状況は、この悲惨な状況を産んだ原因は、本人の罪なのか、それとも両親の罪なのか、と質問したのです。その質問にイエス様は答えられました。「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。**」(ヨハネ9:3) 今まで当たり前のように、全ての人々が肉体的な不幸は、本人か、両親の罪の結果であると考えていた。けれども、肉体的な不幸と思える事柄や絶望と思える状況は、「**神の業がこの人に現れるためである。**」と驚きの言葉を語られたのです。その言葉に弟子たちはショックだったでしょうが、すぐに忘れてしまったのではないかと思うのです。

イエス様は、ご自分が去って行くことにより聖霊が与えられると言われました。「**弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。**」(ヨハネ14:26)と言われました。弟子たちは、イエス様から多くの事を学び、大切な事柄を学び、イエス様の愛ある言葉を聞きながらも、耳に、心に残っていませんでした。けれども、ペンテコステの日、聖霊が与えられて弟子たちは、聖霊が彼らを教え、イエス様が語った言葉を思い起こさせて下さるのです。弟子たちはこれから、聖霊の導きの中で、イエス様の言葉を思い起こし、思い出させていただきながら、イエス様を証しする証人となるのです。

## 二、私にはなくてもイエス様にはある

ペトロとヨハネが午後3時の祈りの時に神殿に行くと、そこに生まれながら足の不自由な男が運ばれてきたのです。けれども、この時の弟子たちは、以前イエス様に尋ねたように、「**彼が生まれながら足が不自由なのは本人の罪か、両親の罪か。**」という質問は彼らの心にはありませんでした。前と同じだったかも知れませんが、足の不自由な男は、ペトロとヨハネに施しを乞うたのです。ペトロとヨハネは彼をじっと見たのです。「誰の罪の結果」というのではなく、イエス様がかつて語られた言葉を聖霊は思い起こさせたのです。「**神の業がこの人に現れるためである。**」と。

かつて、生まれつき目の見えない人に、「**ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか、本人ですか。それとも、両親ですか。**」と尋ねた弟子たちでした。ペトロとヨハネもそうでしょう。しかし、イエス様が、「**神の業がこの人に現れるためである。**」と宣言し、生まれつき目の見えない人を癒されたことを聖霊は思い出させられたのです。ですから、ペトロとヨハネは、彼らに対して生まれつき足の不自由な男が施しを乞うたので、ペトロとヨハネは彼をじっと見たのです。かつて、イエス様が生まれつき目の見えない人を見たように、多くの病んでいる人々をイエス様が見たように、ペトロとヨハネは愛と憐れみの心で、イエス様が病んでいる者をいつくしまれた眼差しで、この男を見たのです。そして言いました。「**わたしたちを見なさい。**」と。

足の不自由な男は、毎日「美しい門」という神殿の門のそばにいて人々に施しを乞うて

いたのです。それが、彼の生き行くためにすべきことでした。彼は、生活のためにここにいたのです。そして、ペトロとヨハネは「わたしたちを見なさい。」と言いました。施しを乞うた足の不自由な男は、期待して何かもらえると確信して、ペトロとヨハネを見つめたのです。このような状況でペトロの口から発せられた言葉は、「わたしには金や銀はない」という言葉でした。この男からしたら、「馬鹿にするな！」ということです。期待だけさせて、金や銀はないとは何事だ、ということです。

けれども、ペトロとヨハネは金や銀、あげるべき食べ物等は本当に持っていなかったのでしょうか。それにしても、冷静です。落ち着いています。以前の肉によって頑張り、世的な考えしかできないペトロとは別人のようです。自分には何もなくても、全てのものを持っておられるイエス様が共におられること、イエス様と同じ人格を持つ聖霊様が共におられることを信じていたのです。そして、語るのです。「持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」ペトロはイエス様の名によって宣言したのです。自分に力があるからではありません。自分に癒す自信があったからではありません。イエス様に、聖霊様に信頼していたからこそ、語ることができたのです。聖霊の力によって、イエス様を証しする証人としての力を発揮したのです。

### 三、聖霊はイエス様にある希望を宣言する

聖霊を受ける前のペトロは、生まれながら目の見えない人を見ると、その人の罪のせいなのか、両親のせいなのか、と罪の結果そのような境遇にあるのだと信じていました。けれども、聖霊を受けてイエス様の心が与えられて、イエス様がお感じになるように、ペトロも感じ、イエス様が見られるように、ペトロも見ることができたのだと思うのです。ですから、生まれながらの足の不自由な人を見て、かつては、「生まれながら足が不自由なのは、本人の罪のせいか、両親の罪のせいか」と苦しみ悲しみを罪の結果とただ位置付けて、その人の苦しみや悲しみに寄り添うことができませんでした。彼が生まれながら足が不自由であるということがどんなに苦しいのか、辛いのか。そして、足が不自由のゆえに、仕事もできず、人に運ばれてくる毎日の生活、人に恵んでもらわなければ生きていけない毎日の生活、将来に何の希望もない、いつも人の世話にならなければ生きてゆけない人生でした。彼は、生まれながらに足は不自由だけれども、心は純粹で、きれいであるというのではなく、生まれながら足が不自由という状況は、彼の心にも暗い影を落としました。健康な人を見ては恨み、自分のような者にお金をくれるのは当たり前で、自分を無視し、恵まない人をにらみつけ、その人の不幸を祈るといようなすさんだ心だったのではないのでしょうか。

自分の人生にも、他人にも、そして、神様にも何も期待しない惰性の毎日、心も体も痛んだ、彼の人生には、希望という字は失われていたのです。

そして、かつてのペトロやヨハネも、そのような人を見ても罪の結果だとしか考えられない。希望を見出せないでいたのです。けれども、神の子イエス様が人間の姿となって、人間の世界に介入し、苦しみと悲しみの人生を送る人々、全く希望を持ってないでいる人々に、神の言葉と癒しの業を通して神様というお方を信じ、信頼し、委ねることの素晴らし

さを語り、イエス様ご自身が全人類の罪の身代わりに十字架にかかり、ご自分の尊い血を流し、その体を持って、身代わりの死を通して、父なる神様は私たち人間の罪を赦して下さり、イエス様が死んで葬られ、よみがえられたことにより、救いが完成し、私たちは神様の前に義とされ、死んで終わりの人生に、死んでも生きる人生へと導かれたのです。そして、イエス様がよみがえられて50日目に、聖霊が与えられて、ペトロやヨハネは、自分の力や肉の頑張り、人間的な考えや常識で動くのではなく、聖霊の導きと教えに導かれて、イエス様を伝える者となるのです。

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」とイエス様にある希望を宣言したのです。そして、彼は立ち上がることができた。癒されて神様を賛美する者へと変えられたのです。希望も喜びもない人生に、イエス様にある希望が語られ、癒され、神様を賛美する人生、新しい人生が始まったのです。

### Ⅲ 結論部

私たちの人生においても、それぞれに課題や問題、苦しみや悲しみがあります。どうして私の家族にだけ、私にだけ、このような苦しみがあるのだろうか。人を見たら幸せそうに見える。けれども、それぞれに人生における痛み、あるいは、信仰生活における痛みはあるのです。そして、苦しみの中にある人があなたを見たら、なんと幸せそうな、と見えるのかも知れません。

5月18日の金曜日にキューバで飛行機事故があり、110名の方々が亡くなりました。ニュースを見た方もおられるでしょう。この亡くなった方々の中に、東部キューバナザレン教会の牧師夫妻10組、20名の方々が含まれていました。リトリートの集会を終えて帰るところでした。それぞれに牧会伝道しておられた教会、信徒の方々は絶望と悲しみの中にあります。特に、牧師夫妻の子どもたちは、一瞬のうちに、両親を失ったのです。このような状況の中で、牧師夫妻を失った教会の皆さんや、両親を失って絶望の中にある子どもたちには希望がありません。私たちには、彼らを慰めることのできるものは何一つ持ち合わせていません。私たちにはないのです。しかし、イエス様にはあるのです。ペトロのように絶望の中にある人に語ったように、イエス様にある希望、イエス様にある慰めを語ることができるのだと思うのです。

今日は、礼拝後にギデオン教会の証しを聞きます。聖書配布を通して福音を語るのです。皆が皆、喜んで聖書を受け取るわけではありません。面白がって聖書を受け取り、破り、捨てられるということもあるのです。けれども、今日の生まれながらに足の不自由な男のように自分の境遇を恨み、絶望の中にある希望のない人々に、聖書を通して、イエス様を紹介しているのです。そして、聖書を手に取り、神様に心を開き、神様を賛美する人生へと変えられた方々が多くいるのです。私たちには、絶望の中にある人、苦しみの中にある人に、何もできないかも知れません。私たちには何もないのです。しかし、イエス様にはあるのです。その人を癒し、慰め、救い、支えることができるのです。希望のない時にこそ、イエス様には希望があるのですから、イエス様を語りたいと思うのです。